



りんごの音符

14



バイオリンを始めたのは3歳の頃です。祖母の友人がバイオリン教室を開いていて、その方がクリスマスプレゼントに16分の1サイズの1番小さいバイオリンをくれました。それが教室に通い始めたきっかけ。幼稚園の年長の時、新聞社に勤めている父の転勤で広島から東京へ引っ越しました。バイオリンを習った方なら誰もが通る「練習バイオリン

私はソロ以外にカルテットとしても活動していて、セカンドバイオリンを担当しています。主旋律を弾くファーストバイオリンに対し、セカンドバイオリンは主旋律を支えるハーモニーやリズムを刻む役割です。私の声はどちらかというと低いので、中音域を弾いている時に音が自分の声であるように感じることがあります。華やかな高音はもちろん、幅広い

個性を感じ、ブラームスは大きな森が目の前に広がるような壮大なスケールの曲が多い。ラフマニノフはロマンチックで、精神を病んでいたシューマンの楽譜からは二人人格だったことが感じ取れます。音楽家の人の柄や曲の背景を知ると、クラシックはもっと楽しめるようになると思います。

バイオリニストにもさまざまなタイプがあります。楽器を弾くこと自体を楽しむ人もいれば、技術を磨くことに全力を注いだり、楽譜の構造に魅力を感じる人も。私はとにかく可

バイオリン 北田 千尋さん（広島県出身）

音楽祭、人生変わる経験に

教本」を書いた方の「思女である練習坊主さん」に習うことになって。それまでは教室に行ってもジョースを飲んで帰る」といような遊び感覚でしたが「すこ先生に習うんだからしっかりやろう」と幼いながらに気持ちを込め、練習したんです。

家族が音楽関係の仕事ではなかったことも幸しく学べた理由かもしれません。小学5年で広島に戻った後、中学3年のコンクールで1位となり、音楽の道に進もうと思いましたが、バイオリンの魅力は何よりも音色の美しさに、一つの音を出しただけで心の底に響く感動があります。

現在私が使用するバイオリンは1750年くらいに作られたもの。大変貴重なため楽器が目に留まる所がないとソワソワします。天候や湿度は常に気にしています。日々の細かなメンテナンスは欠かせません。よく聴く作曲家。校歌は難しいですね（笑）。モーツァルトはもちろん、ベートーベンも楽曲から人

能な限り長く、音楽で感動し続けることが願いです。これまで韓国国際音楽祭や宮崎国際音楽祭など各地のさまざまな音楽祭に出演してきましたが、実を言うとアウトリーチ（出前演奏会）の経験はほとんどありませんでした。今回出演させていただいた「青い海と森の音楽祭」では、アウトリーチのメンバーの一人として出演し、1回1回の演奏の大切さや準備に気付く

「青い海と森の音楽祭」のために結成された「アオモリ・フェスティバル・オーケストラ」による演奏会に出演した北田さん＝7月6日、青森市のリンクステーションホール青森

「アオモリ・フェスティバル・オーケストラ」による演奏会に出演した北田さん＝7月6日、青森市のリンクステーションホール青森

「アオモリ・フェスティバル・オーケストラ」による演奏会に出演した北田さん＝7月6日、青森市のリンクステーションホール青森

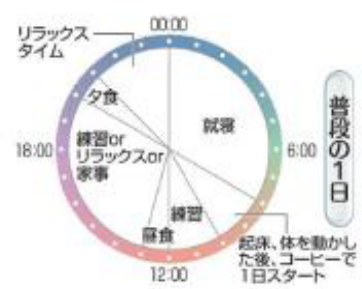
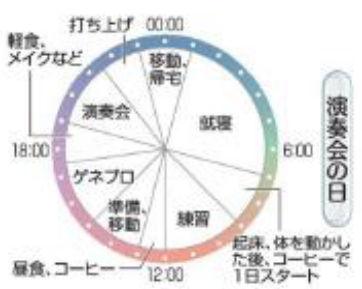
「アオモリ・フェスティバル・オーケストラ」による演奏会に出演した北田さん＝7月6日、青森市のリンクステーションホール青森



「青い海と森の音楽祭」のために結成された「アオモリ・フェスティバル・オーケストラ」による演奏会に出演した北田さん＝7月6日、青森市のリンクステーションホール青森

へきた・ちひろ 1996年、広島県出身。広島交響楽団コンサートマスター。桐朋学園大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了後にアリュッセル王立音楽院に留学。第7回仙台国際音楽コンクール4位、第1回ブラチスラヴァ舞台芸術アカデミー国際音楽コンク

ール2位など受賞歴多数。カルテット・アマビレのメンバーとしても活動し、第4回A.R.D.ミューン国際音楽コンクール或西重奏部門で3位と特別賞を受賞した。NHKエドレ・クラシック音楽館「ななメデア」出演も多数。



※次回10月14日に掲載します。

音楽はおもしろい

クラシックの歴史

クラシック音楽は長い歴史の中で少しずつ形を変えてきました。時代ごとに、その時代ならではのおもしろさがあります。

まず「バロック時代」（1600年ごろ～1750年ごろ）は、バッハやヘンデル

が活躍しました。音楽はとてもきらびやかで、建物の装飾のように細かく美しい工夫がされています。パイプオルガンやチェンバロの音色はこの時代を代表する響きです。

次の「古典派時代」（1750年ごろ～

1820年ごろ）になると、モーツァルトやハイドン、そしてベートーベンが登場します。この時代の音楽は「わかりやすさ」と「バランス」が大切にされました。メロディーは歌のように覚えやすく、伴奏も整理されているため、聴く人が全体の流れを感じ取りやすいのです。シンフォニーやソナタといった今でも有名な形が生まれ、音楽はより親しみやすくなりました。

「ロマン派時代」（1800年代）には、作曲家たちが自分の気持ちを音楽にこめました。ショパンやリストはピアノで人々を感動させ、チャイコフスキーは壮大なオーケストラ曲を書きました。ドラマチックで情熱的な表現が多く、聴く人の心に強く響きます。

1900年以降の「近現代音楽」になると、自由な発想が広がります。ドビュッシーは絵画のような音を描き、スト

ラヴィンスキーは力強いリズムで観客を驚かせました。クラシック音楽は新しい表現を追い求め、今も進化を続けています。

クラシック音楽は、時代ごとに性格が大きく変わります。好きな作曲家や時代を見つけると、聴く楽しみがもっと広がるのではないのでしょうか。

（県吹奏楽連盟監修）

2026年11月1～8日に第2回「青い海と森の音楽祭」が開かれます